

東北地域での栽培に適した わせ 早生の飼料イネ品種「べこごのみ」

“べこ”は東北の方言で牛のこと、「べこごのみ」は牛のエサに使うイネ（飼料イネ）の新しい品種名です。牛が好んで食べるイネになってほしい、という願いがこめられています。今、飼料イネはわが国の農業の将来を考える上で、とても重要な位置づけにあるのです。

《なぜ、飼料イネが重要？》

今年8月にわが国の2006年の食料自給率が公表され、新聞などでも話題になりましたが、熱量ベースで39%と主要先進国の中では最低の水準となっています。家畜のエサ、飼料自給率に至っては25%と、4分の3を海外からの輸入に頼っているのが現状です。農林水産省では、2025年までに飼料自給率を35%にまで上げる目標を掲げています。

一方で、私たちが食べるお米の量は、食生活の欧米化などとともに年々減り続けています。お米を作っても売れないので、使われない田んぼが増え続けています。現在、余った田んぼを畑にして、大豆や麦などの作物が作られています。田んぼで家畜のエサになるイネを作れば、飼料自給率が上がり、田んぼの有効利用にもつながるため、まさに一石二鳥です。そんなことから近年、飼料イネが脚光を浴びるようになったのです。



「べこごのみ」の草姿

《「べこごのみ」はこんな品種》

飼料イネは、イネの穂と茎葉を一緒に刈り取って発酵させ、牛のエサにする稲発酵粗飼料いねはつこうそとしての利用が主流です。稲発酵粗飼料は、全国で約5千ha（2006年）の田んぼで作られ、専用の品種数は10品種を超えています。「べこごのみ」も、それらの一つです。

本品種の最大の特長は、生育が早い“早生”であることです。東北地域で主力の主食用品種である「あきたこまち」より一週間近く生育が早いので、「あきたこまち」よりも早く収穫することができます。これは、飼料イネと主食用品種の両方を栽培している生産者にとっては重要なことです。飼料イネを収穫した後に主食用品種の収穫に移ることができるため、作業がしやすくなるのです。「べこごのみ」の乾物収量は、早生の多収品種「アキヒカリ」よりも6%多く、1.2トン/10aあります（4年間の平均）。2005年には、乾物収量1.6トン/10aの多収事例もありました。

低コスト稲育種研究東北サブチーム

山口誠之

YAMAGUCHI, Masayuki



《飼料米としての利用も》

最近、トウモロコシを中心とした飼料の国際価格が急騰し、わが国の畜産にも大きな影響を与えています。そこで、稲発酵粗飼料だけでなく、お米そのものを家畜（豚や鶏）のエサにする飼料米も、飼料自給率向上の切り札として注目されるようになってきました。「べこごのみ」の玄米収量は、「アキヒカリ」よりも5%多い686kg/10a（4年間の平均）で、2005年には玄米収量816kg/10aの多収事例もありました。飼料米としての利用にも期待がかかります。

《飼料自給率の向上を目指して》

「べこごのみ」が育成されたことで、今まで専用の飼料イネ品種がなかった東北地域の中北部においても、飼料イネの生産が進むことが期待されます。皆さんが何気なく普段食べている牛肉や豚肉の生産は、まだ海外からの輸入飼料に大きく依存しています。飼料イネ生産が進むことで、飼料自給率が上がり、国産の安全な飼料イネで育てられた家畜が増えていくことを期待しています。「べこごのみ」などの飼料イネを食べて育った牛や豚が、皆さんの食卓に当たり前に並ぶ日を願って、私たちはこれからも研究を続けていきたいと思っています。

なお、「べこごのみ」の詳しい特性については、当センターのHP (<http://tohoku.naro.affrc.go.jp/press/2007/1003-1.html>) をご覧ください。



飼料イネを食べる牛